

私の授業実践

教育現場の最前線から

国語から文学へ —— 疑り深さの獲得

戸塚 学 ● 武蔵大学人文学部准教授

大学生を学問という新たな知の領域にいかにつれさせればよいのか。またそこで必要とされる知の鍛錬をいかに行うべきか。こうした問いに对应する授業の工夫や課題について、私の担当する日本の近現代文学の授業を例に述べてみたい。

6年前に前任校に着任して教養科目の文学の授業を持ったとき、学生に授業履修の動機を聞くと、「国語が好きだったから」という回答が多く返ってきた。大学生の日本文学の授業の履修動機として、この答えは比較的一般的なものかもしれない。自身のことを考えても、大学入学の頃には高校の国語のイメージの延長上で文学の授業を思い描いていたような気がする。

高校までの国語の授業では、教材としてさまざまな文学作品を扱う。12年をかけて、授業という形で作家の名前を目にし、その作品の言葉に対峙して考えてきた経験は、大学での文学の授業のイメージ形成の手がかりになる。一方で、授業担当者として悩ましく感じたのは、学生が思い描く国語のイメージをどの程度生かし、どのよ

る」ことだった。

ガイダンスの授業に続く回で行ったのは、学生に文学作品を読ませ、「問いをひたすら立ててもらおう」作業である。国語の授業では、教員の側が問いを用意し、生徒の側が答えを導く。授業の形態はさまざまであっても、教室の前方から問いが投げかけられ、教室の後方から答えが返されるといふ点は大きく動かない。だが大学の授業は、講義であれ演習であれ学生が教員の想定する正答を返すという形にはなりにくい。教員の側はある考えを述べるが、それは答えが定まらない自らの問いを投げ出す感覚に近い。その問いに触発されて、学生も異なる角度から自らの問いを立てられるようになることが望ましい。

素材として取り上げたのは、川端康成の「夏の靴」である。海辺の街道で乗合馬車の馭者が一人の少女と出会う

て別れる物語で、出来事の展開はシンプルである。解説を加えつつ全体を音読し、人物や出来事の展開を場面ごとに整理する。学生は「こういうことは知っている気がする」といった様子で話を聞く。その上で、「作品を読んで変なところ、気になったところを探して語句に傍線を引き、余白に気になった理由を書く」と指示を出す。

ここで多くの学生が動きを止める。教員の問いへの答えを導くことには慣れていても、自分が「変」だと感じることを挙げることには慣れていない。そこで「考えすぎず少しでも「変」なら線を引く」、「合っているかを気にしない」、「なるべくたくさん線を引く」よう促す。特に理由の言語化が難しいので、机の間を回りつつ線を引いた学生を見つけ、なぜ線を引いたかを聞いて考えを引き出す。チョークを渡し、口頭で答えたことを黒板に書かせる。この辺りのやりとりは高校の国語風である。

だがそのやりとりの結果、学生が黒板に書く言葉は小説から引き出される潜在的な問いのリストになっている。動物に関する比喩が多い、接続詞の使い方がおかしい、擬音語や擬態語が多い、靴が咲くという表現はおかしい、といった具合で学生の疑問が並んでいく。「夏の靴」はやや実験的な作風の小説で、こうした疑問を読者に引き起

こししやすいテキストである。

何かが変だと感じたその違和感を説明した文に疑問詞をつけると、問いの形になる。黒板に書かれた学生の言葉に手を加えて、「なぜ人物が動物に喩えられるのか」、「擬音語や擬態語の働きはなにか」、「靴が咲くとはどういう意味か」などと変換する。その上で、これらの疑問を踏まえてテキストのどの細部に着目すると答えに漸近できるのかを口頭で指摘していく。最後に、大学の文学の授業では答えよりも問いの探し方を学んでいくとまとめて授業を終える。この「問いのリスト作り」は、その後も文学関連の授業の導入でしばしば行っている。

高校までの授業科目では、教員が投げかける問いの意図を察知して対応するという素直さが無意識に身につけてしまうところがある。だが大学の専門科目では、答えより問いの方を見いだす力が必要とされ、その力は最終的に卒業論文における自分なりの問いの発見につながる。問いを探すには、対象テキストを疑いつつ読むことが必要となる。国語から文学への移行は、学生の素直さが疑り深さへと転換した時に果たされるといえる。

だが、問題はそうした姿勢を専門科目の授業の中でいかに持続的に培っていくかである。結局そのためには問

いを立てる経験を積み重ねるしかないと考えている。経験の蓄積に有効なのはやはり演習形式の授業だろう。勤務校のカリキュラムでは演習科目が重視されており、学生は1年次から4年次まで多くの演習科目を履修する。専門科目の演習では、20名程度の2、4年生が一つの空問を共有してテキストを精読する。この演習で問いを見する経験を積み重ねさせることを意識した。

演習は代表学生による発表の形式をとっている。代表学生以外の履修者もテキストを事前に読み、発表者に質問を投げかけ、議論を行うのが一応の建前である。だが異なる学年の学生が多数参加する中で、次から次へ質問が投げかけられ議論が盛り上がる展開はなかなか想定しがたい。そこで授業では履修者全員にA5判のプリントを配付し、テキストについて問いを立て、問いへの答えを書く小課題を課した。その上で自由討議の形をとらず、課題を参考に全員が発言し、発表者や他の発言者の論点に言及する形をとった。

こうした不自由討議の形態は、一つの論点を深める議論には向かないが、各自が疑問を持ち、さまざまな角度からテキストを疑って読むには役立つ。全員が発言するので、最初の一言を発する抵抗感は引き下げられる。学

生自身が問いを立てるだけでなく、自分と異なる視点の問いを聞き、それに応答しようとする過程で他者の問いが共有される。返却された課題の評価を確認し、紹介される優秀課題を読むことによって、他者の問いと引き比べつつ自らの問いの有効性を確認できる。

こうした問いを立てる経験の機会を広げようと、専門科目の講義の中にも演習をとり入れた。14回の授業を半分に分けて、テーマに沿って7作品を選ぶ。2017年度は前期は森鷗外、後期は太宰治の作品を年代順に扱った。7回を学生の発表と討議の回とし、この回には演習と同様の小課題と討議を課す。次の回は同じ作品を教員が講述する。そこでも大きな問いを立て、その問いに答えるために小さな問いを積み重ねる流れを作る。この形式だと、学生が自分で立てた問いと教員が立てる問いとを突き合わせて作品を読むことになる。取り上げる作品の総数は減るが、講義への学生の集中力は上がった。

いずれの授業の場合も、学生は毎回のように自らの問いを立て、他者の問いを聞く。自らの問いを教室という空間に投げかけ、他者の間に晒されるといふシビリアな経験が、学生を1年で大きく変化させたように見えた。自らの問いを追究する力は、ひいては社会に出た時に周囲

に飛び交う他者の言葉に対抗して自身を守り、自前の言葉でものを考えて生きていくことに役立つだろう。

だが一方でいずれの授業にも課題がある。演習では自由討議の形もとりたいが、そうすると発言の義務感が減じて課題の質が落ちたり、発言者が偏ったりする。演習形式をとり入れた講義科目は、特定のテーマを立てて多くの作品を論じようとする演習を除いた連続的講述が望ましいこともある。また、こうした授業形態は講述を主とする授業よりも圧倒的に履修者が少なくなる。

このように授業を進める上で感じた課題については、近年、学内外の授業研修で話し合う機会も増え、私自身も専門分野を異にする先生方と意見交換する貴重な機会を得た。こうした授業研修や講演会でしばしばテーマとなるのが「学生主体」の授業方法で、自身の授業をこうした方法に絡めて話題に出すこともある。だがテキストを精読して議論すること自体は昔ながらの人文系の授業スタイルであり、そうした言説に引き寄せて語ることはやや違和感もある。また、いわゆる参加型の授業にはかえって何を学ぶかを自ら選択するという意味での主体性を学生から奪う側面があると感ずる。

国語から文学への転換は学生の疑り深さの獲得におい

てであると書いたが、教員の側も疑り深くあるべきだろう。

授業「改善」をめぐる議論にも、新しい時代の変化の中でこそ古さを生かすべきではという疑いの観点があってもよい。自身の学生時代を振り返った時、教員の一言一句が刺激的で聞き漏らすまいと夢中でノートをとる講義もあつた。懸命に聴けば多くを学べる講義は、参加の選択を最終的に学生に委ねる点で学生「主体」である。学生の参加で補うところのある自身の現行の講義科目も、「古い」講述の形態に引きつける必要があると感ずる。

学生を触発して問いを引き出すためにわれわれがなすべきことは何か。授業「改善」をめぐる議論ではICTや反転授業といった新たな「方法」に注目が集まるが、方法の新規さは内実の空虚さを糊塗することがある点に注意する必要がある。学生を触発するには教員自身が新たな問いを持つている必要がある、そうした問いは日々の授業準備や研究の中から生まれる。教員自身が抱いた問いを深化させ、知識の獲得と思考の鍛錬とを膨大な手間と時間をかけて進めることが、結局は授業「改善」の唯一の近道なのである。こちらが投げかける言葉が学生の中に大きな変化の感覚を引き起こせるような、魅力的で質の高い授業を目指して今後も努力していきたい。

いま、あえてなぜ人文学部か——女性の生涯を視野に入れた改革

湊 晶子 ● 広島女学院大学学長

はじめに

私は半世紀以上首都圏の大学で働き、2014年初めて地方の広島女学院大学学長に就任し、改革に取り組むこととなった。これまで「入学定員800人未満の私立大学では72%が定員割れを起こしている」との記事を目にしていたが、自ら地方の大学に身を置いて初めて定員確保の苦労を実感した。

広島女学院は創立以来130年余キリスト教精神に基づいた平和教育、人格教育を行い優れた人物を世に送り出してきた。しかし近年「既存の文学部」を解体して13メジャーも有する「国際教養学部」に改編したため、社会的に評価が得られず定員割れが加速し、早急に再改革が求められる事態に陥った。私はその解決

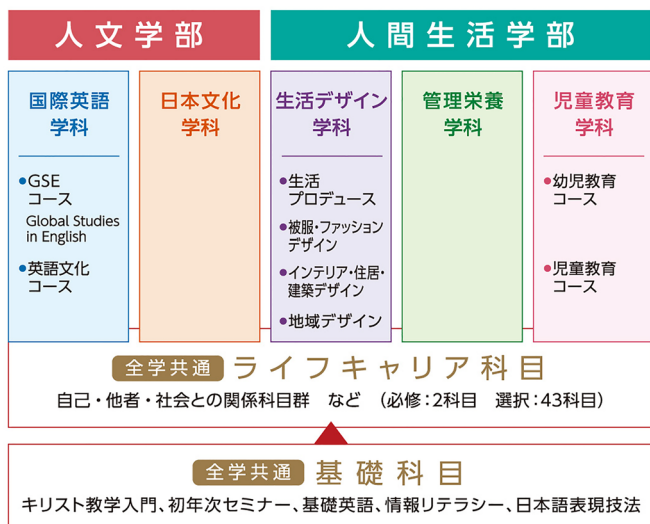
の任を託されて学長に就任した。

就任以来女子大学だからこそ可能なプログラムを模索し、大学全体の再改革を試み2018年度の入試に漕ぎつけた。「新設人文学部」では恒常的な定員割れを克服し、定員の約1・3倍を確保することができ安堵している。本来ならば新設人文学部の学部長が執筆するところであるが、大学全体の改革を実行した関係から私が報告することとなった。

1 2学部「分立型」から「融合型」に

「地域と世界に貢献できる女子大学」として、女性の生涯に有用な力を深く、濃く受けられることを特色として2学部5学科に再編した。すなわち、人間への理解を深める「人文学部」、女性の生涯に関わる資格や

学部・学科編成



図表1 広島女学院大学の学部学科編成

知識を養う「人間生活学部」の2学部とし、両学部をつなぐ「ライフキャリア科目」を基礎科目に加え設けることによって、女性の生涯に有用な「学問」と「実践」の両方を学べる環境を実現した。

女性の生涯を生かす基礎となる「ライフキャリア科

目」を45科目設定し、他学科の科目で自分の将来構想に役立つ科目を自由に選択できるように再編した。「ライフキャリア科目」は女性史、女性とライフスタイルなどの「自己との関係科目群」、対人関係の心理などの「他者との関係科目群」、キリスト教と社会、ヒロシマと平和など「社会との関係科目群」「その他科目群」の4科目群からなり、どの学部・学科に属していても自由に選択することができる。例えば、日本文化学科の学生が食や健康を、また地域貢献についても学び、国際英語学科の学生が日本文化を学び、生活デザイン学科・管理栄養学科・児童教育学科の学生が語学力を培うこともできる。基礎科目、ライフキャリア科目、専門科目からなる学びによって女性の一生涯を視野に入れた教育が可能となる。

2 本学の「人文学部」の特質

(1) いまあえてなぜ人文学部か

ある時期から国際化教育が強調され、留学制度の完備がグローバル教育のパロメーターのごとく考えられた。英語が話せるだけでは国際人とはいえない。国際会議に出席しても、イエスとノーが明確に言えなければ

ば国際社会から取り残される。国際人とは「ぶれない個・私」を明確に持った人格者でなければならない。

新体制は「リベラルアーツ教育」「グローバル教育」「キャリア教育」を教育の三本柱とし、「リベラルアーツ教育」においては、キリスト教に立脚した人格教育により冷静な判断力を備えた「ぶれない個・私」を育む。「グローバル教育」においては、自己の意思を明確に表現し積極的に討論できる論理的思考力、それを伝達できる言語力を育成し、海外研修などを通して国際感覚を取得する。「キャリア教育」においては、女性の全生涯にわたって活躍できるライフキャリア概念を構築し、地域社会ならびに国際社会に貢献できる女性の育成を目指す。新設の人文学部は「国際英語学科」と「日本文化学科」で構成され、一見、時代に逆行するように見えるが、内容は実に今日的ニーズに応えるものである。

(2) 人文学部の内容

国際英語学科においては、すべての専門科目を英語で受講する「GSE (Global Studies in English) コース」と、国際共通語としての英語と英語圏の多文化を学ぶ「英語文化コース」を設定している。最大10名の少人数

クラスでの英語教育や、単位認定される授業科目の中で最大4回の海外研修の機会を設けるなど英語力の修得を重視している。また、留学やTOEICなどの資格試験に向けて、週1回の個別英語指導を実施する。航空業や旅行代理店、中学・高校教員（英語）など、英語を活用する職種で活躍できる人材育成を展開する。日本文化学科においては、日本の文学や文化を深く理解すると同時に、読む・書く・聞く・話すと言った日本語能力を向上させ、日本固有の文化を世界や地域に発信する力を修得する。国内フィールドワークや海外研修を実施し、自国と他国の文化や習慣の違いを体感できるプログラムを組み、国際性豊かな人物を育てる。もちろん中学・高校教員（国語）を目指すことも可能である。このように新設の人文学部は国際英語、日本文化を通して国際社会で自立して活躍できる人物を育てる。

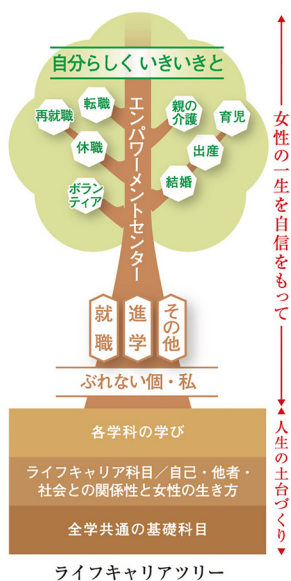
(3) 本学人文学部の特質

私にとって「実務系の学科から成り立っている人間生活学部」が「人文学部」と並立してある女子大学で仕事をするのは初めての経験である。男女雇用機会均等法、育児・介護休業法などもない時代に3人の子育

てと仕事の両立で苦勞した経験から、広島女学院大学の2学部は、内容的に女子教育の推進に理想的であると判断し、今回、人文学部再編にとどまらず人間生活学部の充実にも取り組んだ。

3 一生涯の大学・エンパワーメントセンター

成果主義の導入や育児・介護休業法の普及などで、性差に関わらず働ける環境が次第に整って来たが、企業内で責任ある地位に就く女性はまだまだわずかである。共学の大学では、卒業と同時に大学との関係は薄れるが、広島女学院大学の卒業生にとって母校は「一生涯の大学」となり、人生の節目に戻ってリフレッシュできるようにエンパワーメントセンターを創設した。



図表2 ライフキャリアツリー

3年目を迎える学長講演、再就職セミナーなどは、広島女学院大学卒業生が何十年ぶりに母校に帰りリフレッシュして、新しいビジョンをもって職場や家庭に帰る良い機会となっている。

本学は地域との連携強化を願い、「広島女学院大学と広島経済同友会との包括的連携」を2017年8月1日に締結した。私自身「ひとづくり委員会」と「まちづくり委員会」に属し経済界の活動に参加している。今後エンパワーメントセンターと広島経済同友会との交流を深め、女性活躍時代に貢献できる学生を育てると同時に女性管理職の支援も大学側から発信できればと願っている。

それを可能にすべく、学内においても教育を充実させ、協力体制を有機的に発展させるべく、これまで学部別に行っていた教授会を「全学教授会」として一本化し、意志決定の業務を簡素化したことも今回の改革の特質である。



広島経済同友会と本学の調印式

わが 大学史の 一場面

日本の近代化と
大学の歴史

日本初の女子薬専設立者、秋山卓爾先生 —ご家族と私の出会い

1 秋山卓爾先生の業績

大阪薬科大学は、1904（明治37）年に設立された大阪道修薬学校どうしゅうをその起源とし、2018年で創立114年になる。その間、多くの先人の計り知れないご苦労とご尽力により、今日に至るが、その中で最も功績を残されたのが秋山卓爾先生である。

秋山卓爾先生は、1873（明治6）年、大和郡山で生誕、柳沢藩士の家に長じ、1892（明治25）年郡山尋常中学校を卒業。同年大阪共立薬学校入学、1894（明治27）年卒業の翌年内務省入省。1898（明治31）年から大阪衛生試験所勤務。そして1904（明治37）年、当時の大阪衛生試験所の所長で、大阪道修薬学校初代校長、平山松治先生と共に、大阪道修薬学校を現在の

道修町の塩野義製薬本社の地に設立された。秋山先生は、教員として学科を担当しながら、校務の責任者となった。

1904（明治37）年は日露戦争開戦の年であり、薬学校設立の背景には、大國ロシアとの戦争という非常事態があつたと思われる。その後、経営難で廃校に直面した1921（大正10）年7月、平山校長の廃校宣言直後の8月に敢然と校長を受け継ぎ、未曾有の困難に対処し、ついに1925（大正14）年1月には日本初の女子薬専・大阪道修女子薬学校の設立を果たし、同年10月に帝国女子薬学専門学校と改称した。秋山先生は、債務関係書類全てに署名し、運営資金を自ら提供し、1939（昭和14）年に66歳で亡くなるまで、35年の永きにわたって献身的尽力を続けて今日の大阪薬科大学の基礎を築いた。先生の功績は、本学設立にとどまらない。女性に初めて

春沢 信哉 ●大阪薬科大学教授、資料室委員会委員長

薬学教育の機会を授けた恩人であり、日本の薬学界の先駆者である。しかし、このような前人未踏の功績も戦後の混乱の中でいつしか人々の記憶から薄れ、またご家族の消息も不明となってしまった。幸い森下利明先生（本学名誉教授）が本学の歴史資料を丹念に検証再確認され、秋山先生の功績を私たちに伝えられた。それは『大阪薬科大学八十年史』にまとめられている。しかし、その後もおご家族の消息は依然不明のままであった。

私が秋山卓爾先生について初めて知ったのは、1995（平成7）年3月、退職を迎えた森下利明先生の最終講義の時である。その中で、森下先生が大学の80年史を編纂されたことに話が及んだ折「本学の幾人かの功労者の中で誰が第一の功労者であるかといわれれば、それは秋山さんであり、秋山さんにいたってはどのくらい私財を使われたのかわからない」とおっしゃったのを聞き、そのお言葉が強く印象に残った。

2 秋山先生ご家族との出会い

2004（平成16）年10月9日のことである。私は、リーガロイヤルホテル大阪の催し会場前のロビーに集う多くの正装の男性や華やかな女性たちの中にいた。これ

から始まろうとする本学創立100周年記念式典を皆と待っていたのである。中には1930（昭和5）年卒の黒紋付きのご高齢の婦人が車いすで来られ、お孫さんの若い女性がそれを押しておられる姿もあった。この賑やかな雰囲気の中で、秋山先生のご家族をお招きできなかったことを寂しく思っていた。

その後、私は札幌で開催された学会の帰りに、妻から頼まれていた名産のクッキー「白い恋人」を持ち帰った。

この北海道土産から思いがけない展開が始まることになる。11月6日（土）朝、家内から、テニス同好会でこのクッキーを出したところ、お仲間の一人、高槻市在住の小野允久様みつひさのお爺様が本学の設立に関わった方であるとの話を聞いた。私は登校し、本学100年史の名簿に評議員小野某の名前を見つけたので、翌日の夜、妻を通じて小野さんに問い合わせたところ、「その方とは関係が無く、私の祖父は秋山卓爾と申します」という短いメールがすぐ届いた。それは、100周年記念式典のほぼ1カ月後のことであった。私はこれに衝撃を受けると同時に、ひとつの懐かしい記憶が蘇った。小学生の頃、祖父が私に曾祖父が残した「其月其日」と題した新聞の切り抜き綴りの中に女子薬剤師の記事があるのを見せてくれたこと

である。私は、曾祖父の切り抜きをまねて夏休みに新聞のスクラップブックを作っていた。幸運なことに、その切り抜き綴りはわが家に伝わっていて、すぐに探し出すことができた。記事の見出しは「女子の職業として有望な薬剤師」というものであり、当時の女子薬剤師のことと、女子薬専以前の大阪道修薬学校（女子部）時代の学生10名ほどの勉学の様子を伝える貴重なものであった（写真1）。この頃、男子は夜間部とし、女子は昼間に授業をしていたということもこの記事にあった。記事の正確な日付はなかったが、その記事は、かつて実際にあった「大阪時事新報」のもので、そこに挙がっている女子生徒の名前と内容から1912（明治45・大正元）年のものと特定できた。記事にある女子生徒は、いずれも本学の同窓会名簿の1907（明治40）年から1913（大正2）年の間の卒業生である。

「大阪時事新報」の記事の抜粋より

- (1) 女子職業として近頃有望とされるのは薬剤師である。

- (2) 授業科目は、物理、化学、植物、生薬、分析、調剤、製煉、局方などであり、毎日の授業時間は

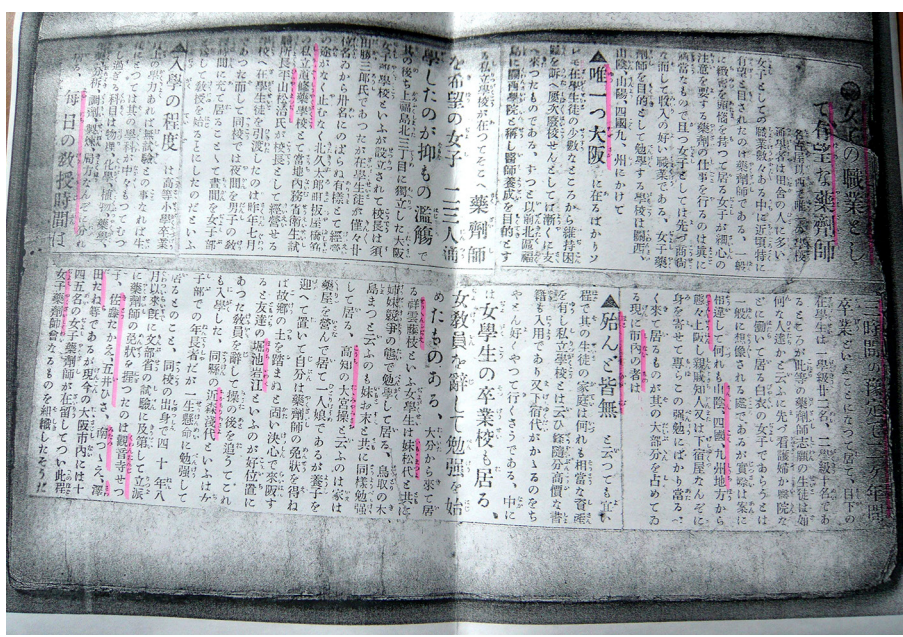


写真1 「大阪時事新報」の大阪道修薬学校女子部の記事。赤字に生徒の名前が見られる。

3時間、2年間で卒業。

(3) 目下の在学生1学年22名、2学年10名でいずれも山陰、四国、九州から上阪し市内の者は皆無と
いって良いほど。生徒の家庭は、いずれも相当な
資産を有する。

(4) 大分から来た祥雲藤枝、妹の松代は、姉妹競争
の態で勉学している。

(5) 高知の大宮操は、葉屋の一人娘で養子を迎え置
いて、自分は薬剤師の免状を得ねば故郷の土を踏
まぬとの固い決心で来阪すると、友達の堀池岩江
は、教員を辞して操の後を追うて入学した。

(6) 同校の出身で明治40年8月以来薬剤師の免状を
得た者は、観音寺せつ子、佐藤たかえ、五井ひさ、
南つつえ、澤田たね等であるが、現今の大阪市内
には十四五名の女子薬剤師が在留して、つい此程
女子薬剤師会なるものを組織したそうだ（ここに
出ている5名は明治40、41年卒業）。

翌日、当時の資料室整備委員長の坂田勝治教授にこの
二つの発見を報告すると大変喜ばれ、二人でその記事に
ある学生を同窓会名簿で確認したりした。続いて、翌年

発足した資料室運営委員会の委員長、石田寿昌教授は、
秋山卓爾先生のご家族を本学にご招待することを委員会
の最初の活動として提案され、矢内原学長は、100周
年事業の一環として実施することとされた。準備は主に
石田先生、坂田先生と運営委員の一員である私が相談し、
また小野允久様には秋山家のご親族への連絡と取りまと
め役として熱心に動いていただいた。

小野様が最初に私を訪ねられた時に、秋山先生と奥様
エツ様の貴重な写真を持参された（写真2）。空襲でご親
族にはほとんど遺品が残っていない中、お孫さまの石田
恵子様（京都市）が所蔵されていたものであった。私は、

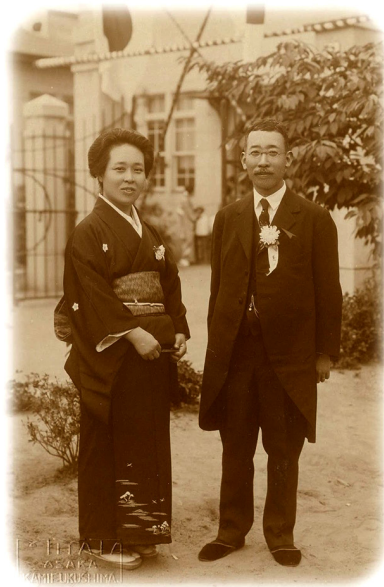


写真2 秋山卓爾先生と奥様エツ様
(大正14年5月9日)

この写真の重要性を直感したので、すぐに森下利明先生に見ていただく、「大正14年5月9日、守口校舎校門前で日本最初の専門学校昇格と創立20周年を兼ねての祝賀会の記念写真」であることが判明した。

ご家族を本学にご招待する準備を進める中で、さらに偶然は続いた。秋山先生は、郡山尋常中学校を卒業されたが、郡山尋常中学は現在の奈良県立郡山高等学校であることを、郡山高校の同窓会（冠山会）幹事の杉井辰彦先生に確認した。そうであれば、私も郡山高校の卒業生、森下先生は、大学卒業後の最初の赴任地が郡山高校、期せずして3人は郡山高校で結ばれていたわけである。私はこの時、必然として秋山先生に引きつけられたように感じた。郡山高校は、旧制時代2度の大火で明治時代の資料がほとんど失われ、1892（明治25）年の卒業生15名の中には、秋山先生の名前が入っていなかった。杉井先生から、秋山先生を次回の名簿編纂時に掲載するのに何か書面などがあればという連絡が入ったので、倉庫で探したところ、秋山先生自筆の履歴書が見つかった（写真3）。その履歴書の最後には、「一、大正十年八月大阪道修薬学校ノ設立者トナル 右ノ通り相違無之候也 大正十二年十二月五日 右 秋山卓爾 印」とあり、大阪

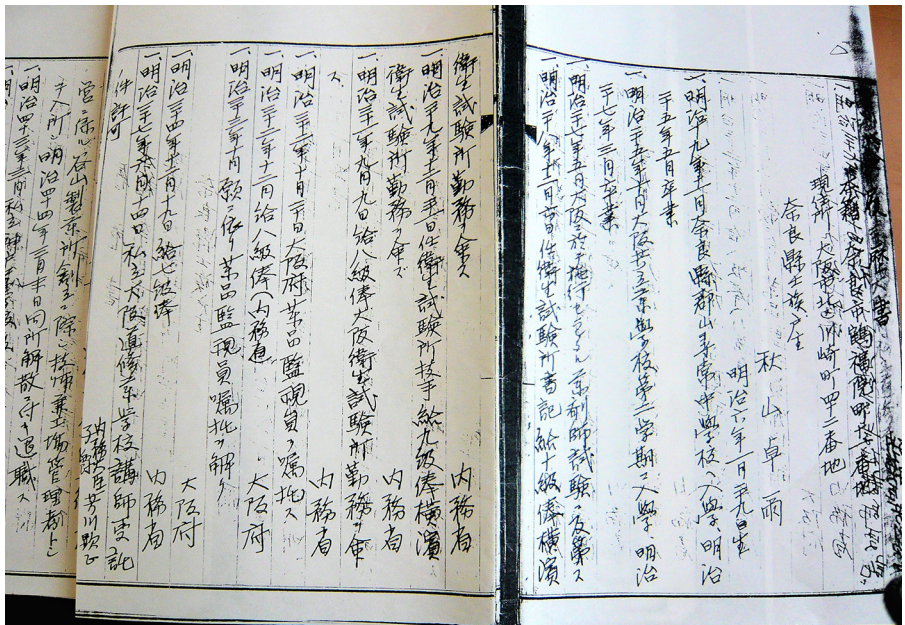


写真3 秋山先生自筆の履歴書

道修女子薬学校設立許可申請のための書類の一つと考えられた。ここで注目すべきは、まさに秋山先生ご自身が創設者であると述べられていることである。通常、本学の創立は明治37年とされているが、1921（大正10）年8月が今に続く大阪薬科大学の真の起源である。

3 秋山先生ご家族の本学訪問とその後

かくして2005（平成17）年7月31日、暑い夏の盛りに秋山先生の直系のお孫様、秋山寿一様（埼玉県狭山市）をはじめとした11家族15名の方々に全国からお越しいただくこととなった。当日は、2時に皆様タクシーで玄関に到着され、まず資料室と本学の歴史ビデオを見ていただき、3時からは、大会議室で理事長、学長を含む本学関係者30名ほどが参加して記念行事を開催した。最初に本学からのごあいさつ、続いて秋山寿一様から秋山家を代表してごあいさつがあった後、先の秋山先生ご夫妻のお写真や関連資料がスクリーンで披露された。その後、森下利明先生から秋山先生に関するお話を伺った。森下先生のお話は秋山先生のご業績だけでなく、80年史には出ていない奥様エツ様の本学に対する並々ならぬご尽力についても話をされた。奥様自身が寄付集めに奔走

された話、さらに、お二人は熱心なキリスト教信者であり、ご夫妻は心の中で信仰と人格がしっかりと深く結びついていたことをお聞きした。また、秋山先生がやさしく高潔なお人柄のため、いかに学生に慕われたかの証として、1925（大正14）年の女子薬専昇格と創立20周年記念式典において、学生が恩師の秋山先生ご夫妻を表彰したということ。さらに、薬専昇格後の



写真4 秋山卓爾先生のご親族と本学関係者（2005年7月31日）
前列1列目、右から2人目は森下利明名誉教授、同5人目は秋山寿一様

学校組織の改組後は、校長・理事長は野崎先生、理事は野崎・秋山・別所・佐藤、幹事は、神山・井宮の6名の先生方が薬専の役員となり、固い結束によって多くの困難を打開していったことに及ぶものであった。お話の内容とともに、森下先生の慈愛のこもった語り口に参加者は一様に深い感銘を受けた（森下先生の講演録は大阪薬科大学紀要2007創刊号に掲載され、本学ホームページからダウンロードできる）。最後に、記念写真の撮影でお開きとなった。（写真4）。今回お越しになった方々は皆様お孫様以降の世代であり、いまさらながら長い年月を感じた。しかし、その場の空気は熱く、予定した1時間をはるかにすぎて3時間近くにも及んだ。

後日、ご家族からご礼状をいただき、全国に離れ離れになった秋山家の人々がこの機に再び親交を深められていることや、秋山先生ご夫妻の逸話のいくつかが寄せられた。秋山先生ご夫妻には一男四女のお子様がおられたが、皆お亡くなりになり、いまはお孫様の世代になられている。いただいたお手紙には、一様に秋山先生の子どもたちである親の世代が戦後とても苦労したこと、親が生きていたらこの出来事をどんなに喜んだことかと書かれてあった。そのお孫様の一人、池川擴子様（大阪市・

小野様のお姉様）の手紙には、母（二女順子）から「秋山のお祖父さん、お祖母さんは、小さな子供達を家の大きな柱にひもでくくって年上のお姉さんや私が面倒を見ている間に薬学のために頑張っておられたのよと何度も聞かされました。また、お母様から父（秋山先生）が亡くなった二、三年は青い空を見上げるとキリストさまのような顔が現れたものです。今でもよく青空の中に同じ温顔が浮かびます（原文ママ）」。直系の秋山寿一様からは秋山性の由来があり、元々は甲斐の秋山郷の出身で、池波正太郎の人気時代小説「剣客商売」の秋山小兵衛、大治郎親子と同じ出であること。そうであれば、郡山藩祖の柳沢吉里（五代將軍綱吉の側用人、柳沢吉保の長男）は、甲斐から郡山に移封され、それによって家臣の秋山家も郡山に移ったとなる。また、小野允久様は本学の近所にお住まいであり、写真が趣味ということもあって、よく大学の撮影をされていたという。しかし、ご親族はおしなべて、自分から大学の功労者の血筋であるということをお明かさないうで過ぎられていた。それは、現代にはなくなつた武門の矜持と明治人の気質がよく残っているためと思われる。秋山卓爾先生は、現在、大和郡山市九条にある光傳寺の秋山家のお墓に眠っておられる。

4 おわりに

薬学6年制が施行されて12年あまりが経ち、私立薬科大学の経営は多くの問題を抱えている。世の中が混迷と退廃の度を深めつつあるかのように思われる薄闇の現代にこそ、秋山先生の業績は鮮やかな色彩を放つ。故を温ね、新しきを創成するために、いまここで森下利明先生の紀要の中の言葉を引用する。すなわち「(秋山先生は)学校のため生徒のため、ひいては人のため世の中のために、私を犠牲にして少しも顧みられなかった」。私は、この秋山先生の崇高な生き方、偉大な功績に学ぶことこそが、本学の教育、研究、経営に、さらには人としての生きかたへのひとつの大きな指針になると考える。

